

LEVEL
4

わたし 私とハムスター





朗読音声のダウンロード
Audio download

★読む前に Before you read

《多読の読み方》

多読とは、とてもやさしい本から楽しくたくさん読んで日本語を身につけていく方法です。

次の4つのルールを守って楽しく読みましょう。

1. やさしいレベルから読む
2. 辞書を引かないで読む
3. わからないところは、とばして読む
4. 進まなくなったら、他の本を読む



《How to do Tadoku》

Tadoku recommends that everyone should start with very easy books and enjoy a lot of them following the 'Four Golden Rules' below.

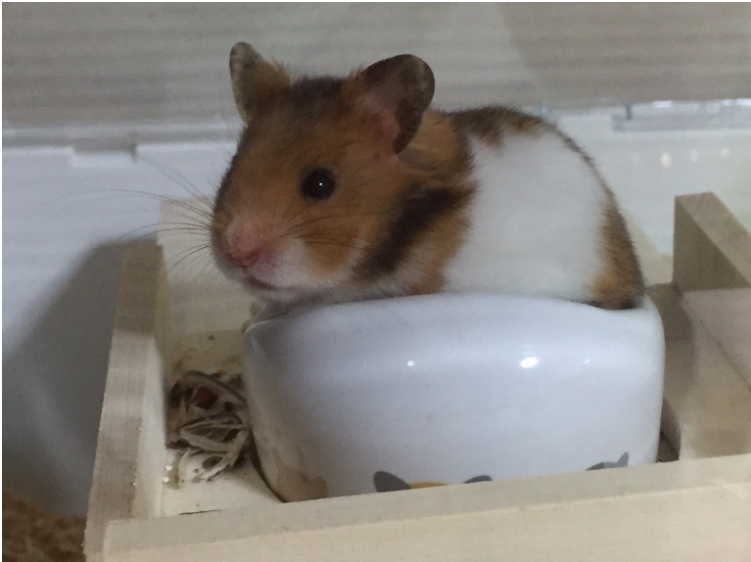
1. Start from scratch.
2. Don't use a dictionary.
3. Skip over difficult words, phrases and passages.
4. When the going gets tough, quit the book and pick up another.



これは、私が中学生の時に本当にあった出来事です。

ある日、両親がハムスターを買ってきた。当時、私は病気のせいで家にいることが多く、家にいる私が寂しくないよう、ハムスターを買ってきてくれたのでした。

家族で話し合い、ハムスターの名前は「マロン」に決めました。



マロンは、回し車が大
好きで、私の部屋では、
夜になるとマロンが回す
カラカラという音がして
いました。マロンがいる
おかげで、私は家にいる
時間が寂しくありません
でした。

マロンが私たちの家に
来て一年が経ったころ、



マロンの元^{げん}氣^きがなくなってしまうま
した。私^{わたし}は母^{はは}といっしょにマロンを
病^{びょう}院^{いん}に連^つれていきました。

病^{びょう}院^{いん}で、マロンは重^{おも}い病^{びょう}氣^きだとい

うことがわかりました。医^い者^{しゃ}は、

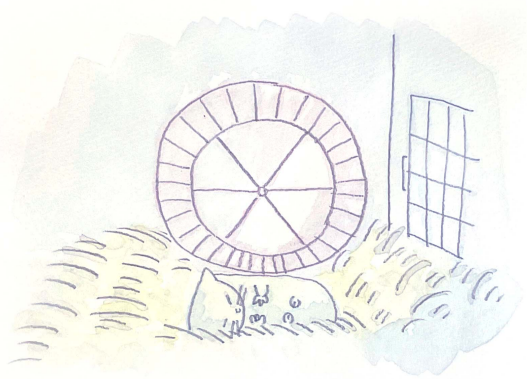
「マロンは、もう、少^{すこ}ししか生^いきら

れない」

と言^いいました。私^{わたし}はそれ^{それ}を聞^きいて、と

ても悲^{かな}しくなり、いつもよりも多^{おお}くの時^じ間^{かん}をマロンと過^すごすようになり
ました。





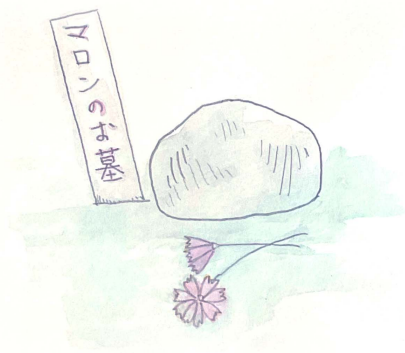
マロンはご飯をあまり食べなくなり、寝ていることが多くなりました。何日か経ったある日、マロンは死んでしまいました。私はとても悲しかったです。そして、家の庭にマロンを埋めて、マロンのお墓を作りました。

その日の夜、私はなかなか眠ることができませんでした

た。布団に入っても、マロン

との思い出や、空っぽになっちゃったケージのこ

とばかりが、頭に浮かんで消えませんでした。



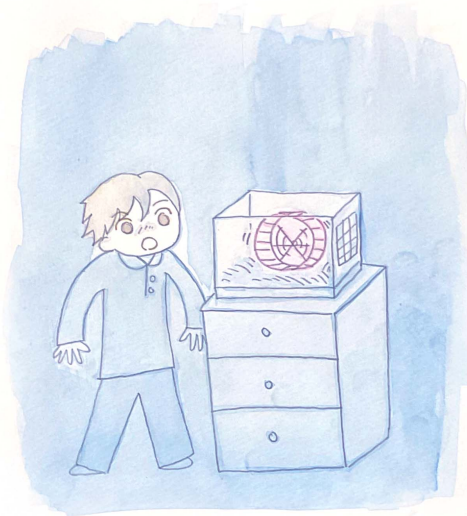
その時^{とき}です。カラカラ：カラカラ：
という音^{おと}が聞^きこえてきました。マロンの
回^{まわ}し車^{ぐるま}の音^{おと}です。

ケージを見^みると、回^{まわ}し車^{ぐるま}が回^{まわ}っていま
す。しかし、マロンの姿^{すがた}がありません。

マロンのいないケージで、回^{まわ}し車^{ぐるま}だけが
回^{まわ}っているのです。私^{わたし}は自分^{じぶん}の頬^{ほお}を

叩^{たた}き、夢^{ゆめ}ではないことを確^{たし}かめました。

私^{わたし}はしばらくマロンのいないケージで回^{まわ}し車^{ぐるま}が回^{まわ}っているのを見^みていま
したが、いつの間^まにか寝^ねてしまいました。



翌朝、マロンのケージを見ると、回し車は止まっていたいました。もしかしたら夢だったのかもしれないと思って、その日の夜も確かめてみることにしました。布団に入ってしばらくすると、カラカラ…カラカラ…という音が聞こえてきます。回し車は次の日の夜も、その次の日の夜も回り続けました。夢ではなかったのです。

夢ではないとわかった私は、このことを父に話しました。それを聞いた父は、

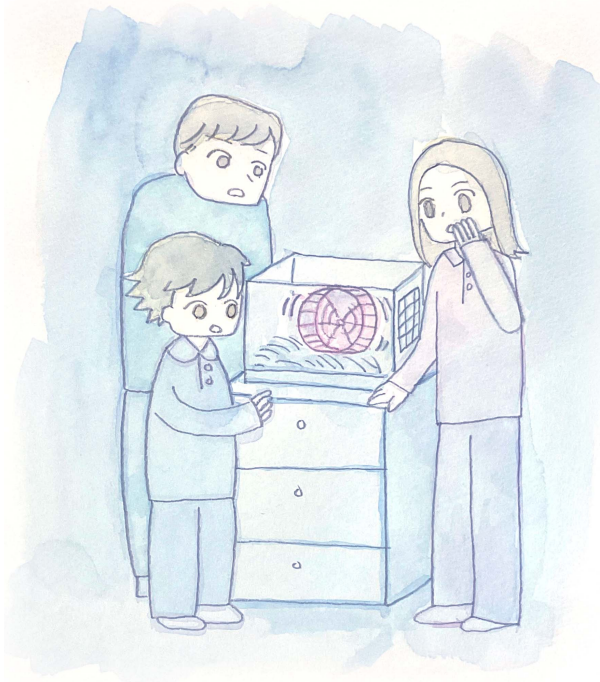
「今晚いっしょにケージを見てみよう」と言いました。

その日の夜、父、母、私の三人
はケージの前で待っていました。

しばらく待っていると、回し車が
回り始めました。それを見た父は
言いました。

「もしかしたらマロンは自分が死
んだことに気がついていないのか
もしれない」

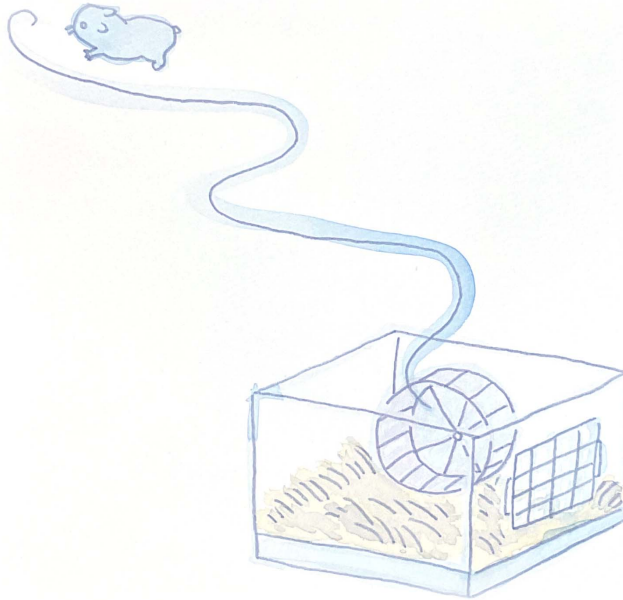
そして、その日は親子三人で、私
の部屋でいっしょに眠りました。



翌朝、父は、マロンのエサ入れ
と水飲み皿を持ってきて、私と母
を起こしました。そして、庭の
マロンのお墓の前にエサと水を置
きました。父は、
「マロン、君はもう死んでしまっ
たから、戻ってきてはいけない
よ」
といい、マロンのお墓に手を合わせました。
私と母も父と同じように手
を合わせました。



その日の夜、回し車は回りませんでした。そして、その後も回し車が
回ることはありませんでした。



これが私が中学生の時に体験した
すべてです。

しかし、この話には続きがありません。
回し車が回ることはなくなりまし
たが、マロンは今でも何年かに一度、
私の夢に出てくるようになったので
す。

そして、夢に出てくるたびに、マロン
の姿が大きくなっているのです。



わたし

私とハムスター

発行 : 2025年5月5日

作 : わ だ とも や和田朋也、

イラスト : くどうみさと

監修 : NPO多言語多読

この作品はJSPS科研費21K00603の
助成を受けた研究のためのプロジェクト
ワークの成果物です。



NPO多言語多読

tadoku.org



この作品はクリエイティブ・コモンズ表示-非営利-改変禁止4.0国際ライセンスの下に提供されています。

This book is licensed under CC BY-NC-ND 4.0

<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>